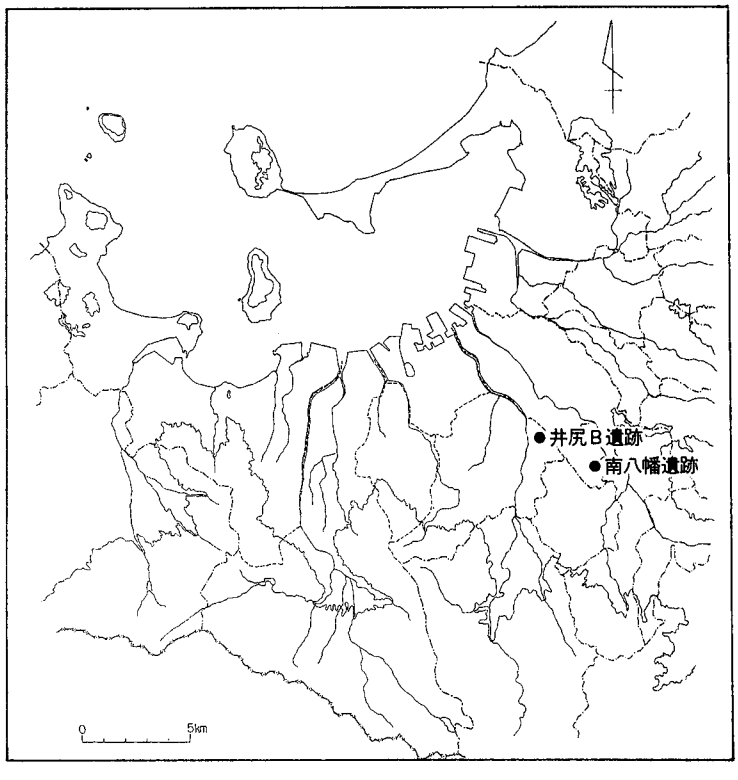
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第441集

井尻Ｂ遺跡４

－井尻Ｂ遺跡第５次調査報告－

南八幡遺跡４

－南八幡遺跡第５次調査報告－



１９９６

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

序

「活力あるアジアの交流拠点都市」を目指して都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な交流の窓口でした。その中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印にある「奴国」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会ではそれらの開発によって失われていく遺跡については、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する井尻B遺跡は「奴国」の拠点集落でもあり、これまで青銅器の鋳型をはじめとして、数多くの貴重な遺構、遺物が発見されております。今回の調査では5世紀の古墳が検出されました。

また、南八幡遺跡はこれまで古代の集落遺構が知られていましたが、弥生時代の竪穴住居跡が発見され、当該期の集落跡が存在することが分かりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

最後に調査にご協力を頂いた坂口常夫様、熊澤章子様、熊澤由美子様をはじめとする関係の方々に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は1994年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した、井尻Ｂ遺跡群第５次調査、南八幡遺跡第５次調査の報告書である。各調査の担当は前者は山口譲治、菅波正人、後者は白井克也である。
2．本書に使用した遺構の実測は山口譲治、菅波正人、白井克也、山口朱美が、遺物の実測図は菅波、白井、中暢子が行った。製図は白井、中が行った。
3．本書に使用した遺構、遺物の写真は山口、菅波、白井が撮影した。
4．本報告書の作成にあたっては佐々木涼子、藤信子の協力を得た。
5．本書に使用した方位は磁北である。
6．本書の執筆は第１、２章は菅波、３章は白井が行った。編集は菅波、白井が行った。
7．本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

本文目次

第１章　はじめに……（菅波正人）……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査の組織……2
第２章　井尻Ｂ遺跡第５次調査の記録……3
　１．遺跡の位置と環境……3
　２．これまでの調査成果……3
　３．調査の概要……5
　４．周濠……6
　５．その他の遺物……8
　６．まとめ……9
第３章　南八幡遺跡群第５次調査の記録……（白井克也）……13
　１．調査にいたる経過……13
　２．これまでの調査成果……13
　３．調査の記録……14
　４．小結……20

挿図目次

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡(1/50000) …… 2
Fig. 2　井尻Ｂ遺跡調査地点位置図(1/4000) …… 4
Fig. 3　第２、５、６次調査地点位置図(1/600) …… 5
Fig. 4　第５次調査地点遺構配置図(1/100) …… 6
Fig. 5　周濠出土遺物実測図(1/4、1/3、1/2) …… 7
Fig. 6　その他の出土遺物実測図(1/4) …… 8
Fig. 7　井尻Ｂ１号墳墳丘復元図(1/200) …… 9
Fig. 8　南八幡遺跡群第５次調査調査区位置図(1/1000) …… 13
Fig. 9　南八幡遺跡群第５次調査遺構配置図(1/100) …… 15
Fig. 10　南八幡遺跡群第５次調査SC－01実測図(1/40) …… 17
Fig. 11　南八幡遺跡群第５次調査出土遺物(1/4) …… 19

図版目次

ＰＬ.１　１．第２次調査全景(南から) …… 10
　　２．第５次調査北側全景(南から) …… 10
ＰＬ.２　１．第５次調査南側全景(北から) …… 11
　　２．１号墳周濠完掘(西から) …… 11
ＰＬ.３　　周濠出土遺物 …… 12
ＰＬ.４　１．調査対象地全景(北東から) …… 21
　　２．調査区全景(北から) …… 21
ＰＬ.５　１．ＳＫ－01 …… 22
　　２．ＳＫ－02 …… 22
ＰＬ.６　１．土器出土状況 …… 23
　　２．出土遺物 …… 23
ＰＬ.７　　出土遺物 …… 24

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市の中南部に位置する福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。平野内にはこの地域が古くから大陸の門戸として役割を果たしていたことが伺える様々な遺跡が発見されている。しかし、その一方で平野内の開発は顕著で、相次ぐビル建築等で日々町並みは変化している。埋蔵文化財課では遺跡内及びその周辺で開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握に努めている。その上で、地権者と遺跡保全のための設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者と協議の上、記録保存のための調査を実施している。本書には1994年度に民間開発に伴って行われた井尻Ｂ遺跡第５次、南八幡遺跡第５次調査地点の報告を掲載する。

Tab. 1　調査概要一覧

調査地点	井尻Ｂ遺跡群第５次調査	南八幡遺跡群第５次調査
調査番号	9408　IZB５	9452　MHM５
地図番号	25－Ａ－３（0090）	12－Ａ－５（0051）
調 査 地	南区井尻５丁目171－３	博多区寿町２丁目84、85－１
開発面積	171㎡	227㎡
調査面積	130㎡	56㎡
調査期間	1994. 04. 11～04. 16	1994. 12. 01～12. 20

2．調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、坂口常夫様、熊澤章子様、熊澤由美子様には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託　井尻Ｂ第５次－坂口常夫　南八幡第５次－熊澤章子、熊澤由美子

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛
文化財部長　後藤直
埋蔵文化財課長　折尾学（前任）、荒巻輝勝
埋蔵文化財第二係長　山崎純男（前任）、山口譲治

調査庶務　埋蔵文化財第一係　吉田麻由美（前任）、西田結香

調査担当　山口譲治、菅波正人、白井克也

調査補助　山口朱美

調査作業　有田恵子　石川洋子　石谷香代子　上野龍夫　亀井好明　古賀典子　小林義徳　澄川アキヨ　高木啓太　田中トミ子　谷英二　寺島道子　徳永静夫　西本スミ　羽岡正春　林厚子　平井武夫　福場真由美　藤野信子　藤野保夫　別府俊美　北条こずえ　松井一美　松永正義　松若敏美　水田ミヨ子　宮路由香　山本良子　森山キヨ子

整理作業　福岡三佐子　衛藤琴美　高田佳奈　満保智恵　宮路由香　佐々木涼子　藤信子　中暢子

1. 博多遺跡群
2. 福岡城
3. 堅粕遺跡群
4. 箱崎遺跡群
5. 吉塚遺跡群
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居遺跡
12. 五十川高木遺跡
13. 井尻B遺跡
14. 曰佐遺跡群
15. 須玖唐梨遺跡
16. 須玖永田遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖四丁目遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目拈渡遺跡
23. 井相田遺跡群
24. 麦野遺跡群
25. 三筑生産遺跡
26. 南八幡遺跡群
27. 雑餉隈遺跡群

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡（1/50000）

第２章　井尻Ｂ遺跡第５次調査の記録

１．遺跡の位置と環境

福岡市の大半を占める福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室身川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狭義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。井尻Ｂ遺跡は両河川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵に立地する。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。この丘陵上には須玖遺跡をはじめとして、那珂遺跡群、比恵遺跡群といった弥生～古墳時代の重要な拠点集落が立地している。井尻Ｂ遺跡もそういった拠点集落の一つで、遺跡の範囲は南北約1.0km、東西約0.3kmが予想され、現在の標高12～15m を測る。

２．これまでの調査

本遺跡はその発見は古く、すでに江戸時代の青柳種信の『筑前國續風土記拾遺』の中に、古墳や鉾の鋳型、古瓦の出土に関する記事が見られる。1995年度年現在、６次の調査が行われたに過ぎないが、その内容を裏付ける遺構・遺物が検出されている。第２次調査地点では５世紀後半の埴輪をもつ古墳が検出された。また、それに先行して古墳時代前葉の低墳丘の方墳や石蓋土壙墓も営まれており、この地点に古墳時代の墓域があったことが分かった。第３次調査地点では南北方向の大溝と百済系単弁瓦が検出され、７世紀後半から８世紀前半にかけての寺の存在が指摘されている。また、６次調査地点では弥生時代後期の土坑の中から小型倣製鏡と銅鏃の鋳型が検出され、本遺跡も奴国の青銅器生産の一端を担っていたと推測される。これらの地点ではそれ以外にも竪穴住居跡や井戸、掘立柱建物等多数検出されており、この地域が弥生時代～古代にかけて重要な拠点であったことが伺える。その他に、第２次調査ではナイフ形石器や細石刃等も検出されている。詳細については既刊の報告書を参照して頂きたい。

Tab.2　井尻Ｂ遺跡群調査一覧

次数	番号	所　在　地(南区)	面積(m²)	調査年	調査原因	備　　考
1	8124	井尻１丁目111－１　外	600	1981	共住建設	福岡市報告書第111集
2	8610	井尻５丁目175－１	930	1986	共住建設	福岡市報告書第175集
3	9201	井尻１丁目293－１、２　外	1060	1992	共住建設	福岡市報告書第411集
4	9335	井尻１丁目747－１	390	1993	共住建設	福岡市報告書第412集
5	9408	井尻５丁目171－３	130	1994	医院建設	本報告書
6	9501	井尻５丁目170、171－１	800	1995	ビル建設	

Fig. 2　井尻Ｂ遺跡調査地点位置図（1/4000）

3．調査の概要

1994年（平成６年）２月22日、坂口常夫氏より、南区井尻５丁目171－３地内における埋蔵文化財事前審査願いが提出された。申請地は井尻Ｂ遺跡の範囲内にあたることから、同年３月８日に試掘調査を行った。調査前の状況は駐車場で、ほぼ平坦である。約20cmの表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で溝、柱穴等を検出した。試掘で検出した溝は、申請地の南側の第２次調査で発見された井尻Ｂ１号墳の周濠に繋がるものと判断された。この成果を基に地権者、施工者と協議を重ね、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1994年（平成６年）４月11日から４月28日まで行った。

本調査地点は井尻Ｂ遺跡の中央南側に位置する。南側隣接地では第２次調査が、東側隣接地では第６次調査が行われている。調査前の標高は約14.2m を測る。調査は廃土の処理の関係で調査地点を半分に分け、約20cmの表土を除去した後の鳥栖ローム層を遺構面として行った。遺構は弥生～古墳時代の柱穴、古墳の周濠等を検出した。古墳は削平のため周濠のみで、墳丘や主体部は検出できなかった。遺物は主に周濠から円筒埴輪、朝顔形埴輪、刀子、土師器等が出土した。

今回検出した古墳の周濠は第２次調査で発見された井尻Ｂ１号墳の周濠の一部である。前回の調査では周濠内から円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、刀等の他、古式須恵器の大甕、高坏が破砕された状態で出土している。墳丘や主体部は削平されたと考えられている。墳形は円墳か前方後円墳と推定されている。また、『筑前國續風土記拾遺』にある「大塚」との関連も指摘されている。古墳の時期は出土遺物等から５世紀後半に位置づけられている。

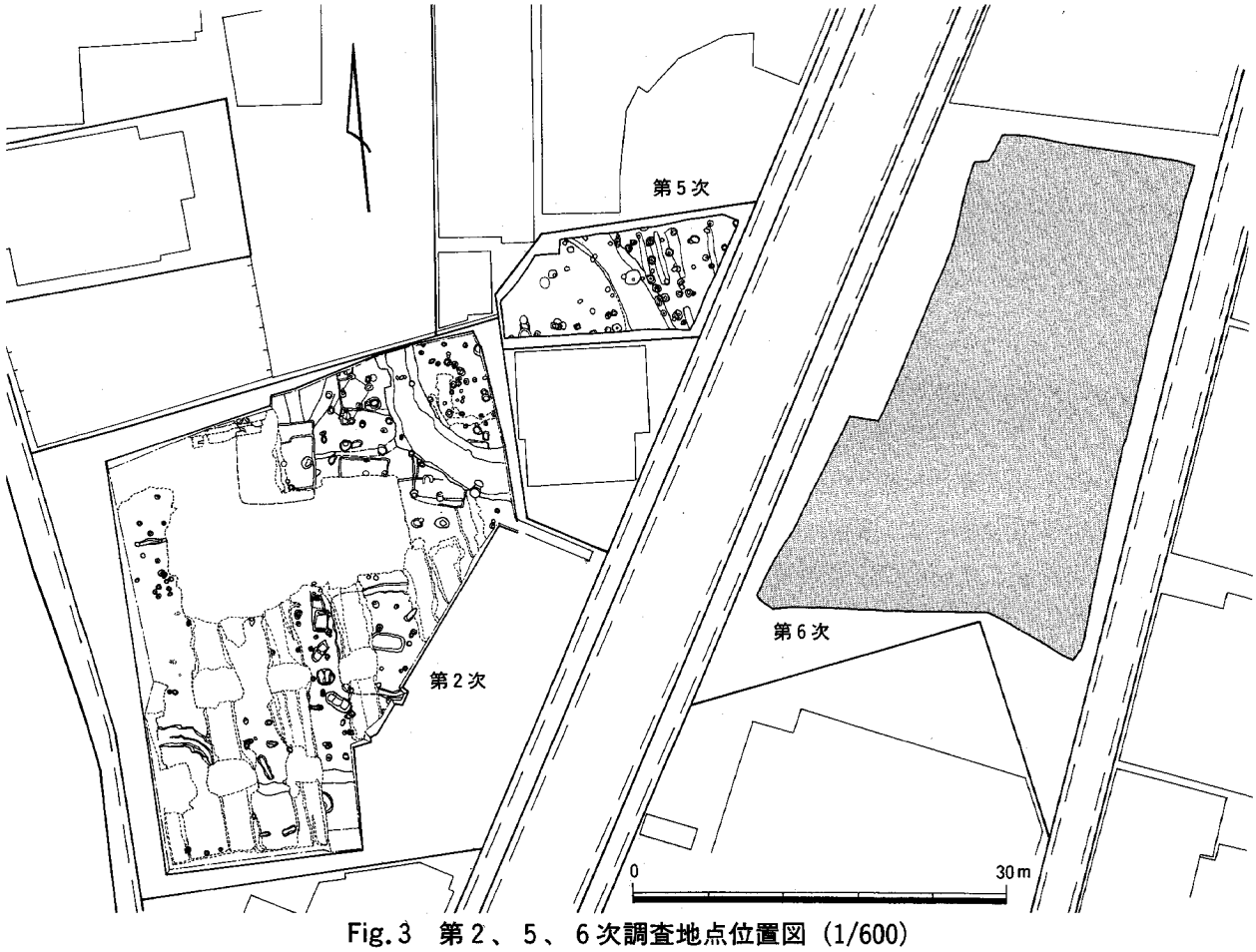


Fig.3　第２、５、６次調査地点位置図（1/600）

Fig. 4　第５次調査地点遺構配置図（1/100）

４．周濠

今回検出したのは古墳の周濠のみで、墳丘や主体部は全く残っていない。周濠の遺存状況も悪く、幅3.0m、深さ0.2～0.3m を測る。古墳は円墳と考えられ、第２次調査の成果と合わせて墳丘径を復元すると、周濠の内側の下端で19m、外側で約24m を測る。今回検出した周濠は全体の約１／６となる。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は円筒埴輪、朝顔形埴輪、刀子等のほか、弥生土器、土師器が出土した。第２次調査で見られた古式須恵器は出土していない。埴輪は細片が殆どで、コンテナ（18ℓ）１箱にも満たない量である。

出土遺物(Fig. 5－1～22)

１～８は埴輪である。１は円筒埴輪の口縁である。口縁端部はわずかに外反する。器面は風化している。色調は黄灰色を呈する。口径47cmをはかる。２～４は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の胴部である。２は断面台形の突帯を巡らし、円形(?)の透かし孔が施される。外面はタテハケの後ヨコハケを施す。色調は黄灰色を呈する。器面には赤色顔料が塗られている。３は外面はタテハケを施す。器面には赤色顔料が塗られる。４は外面は１次調整でタテハケを施し、後にヨコハケを施す。器面には黒斑

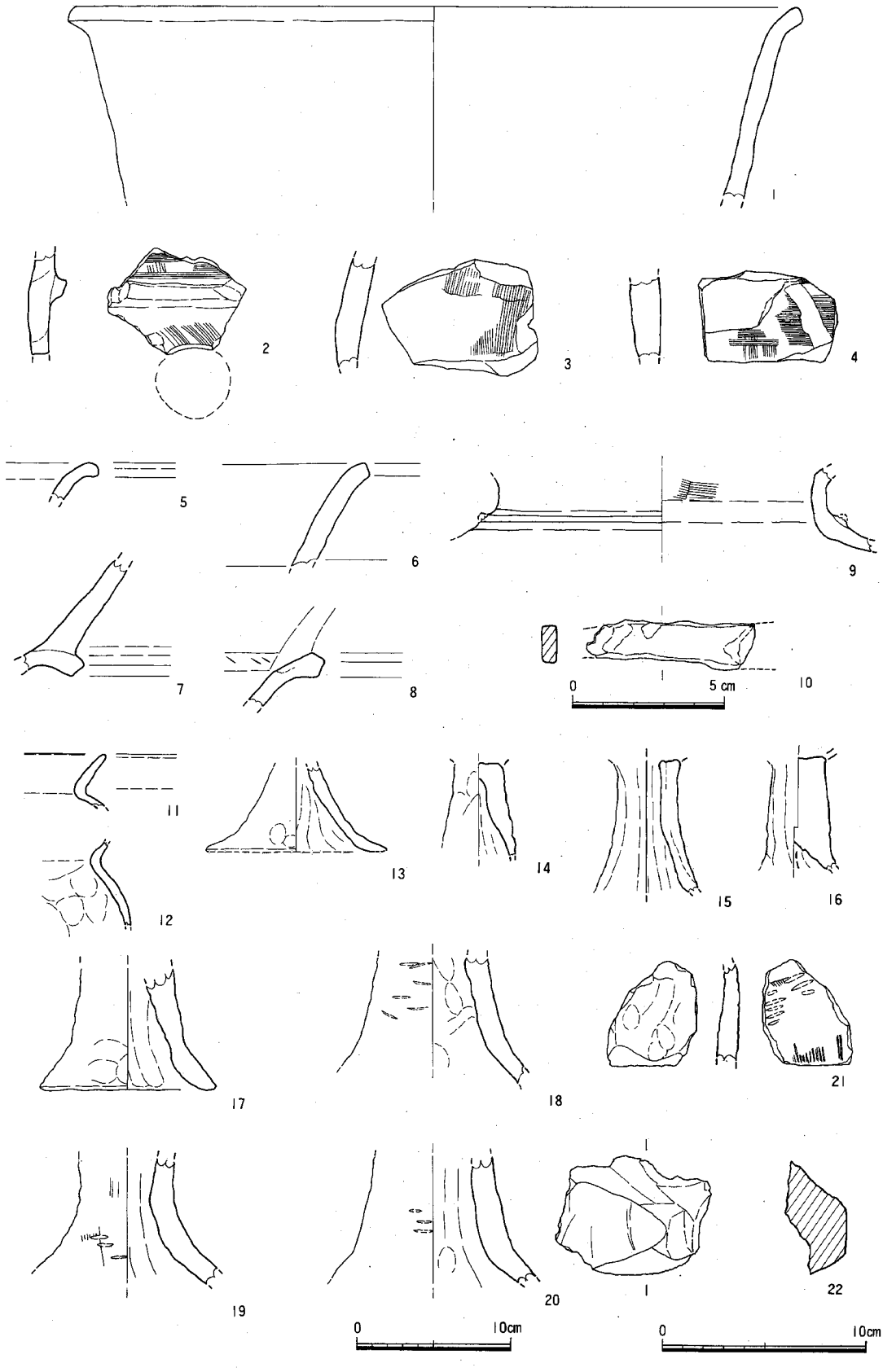


Fig. 5　周濠出土遺物実測図（1/4、1/3、1/2）

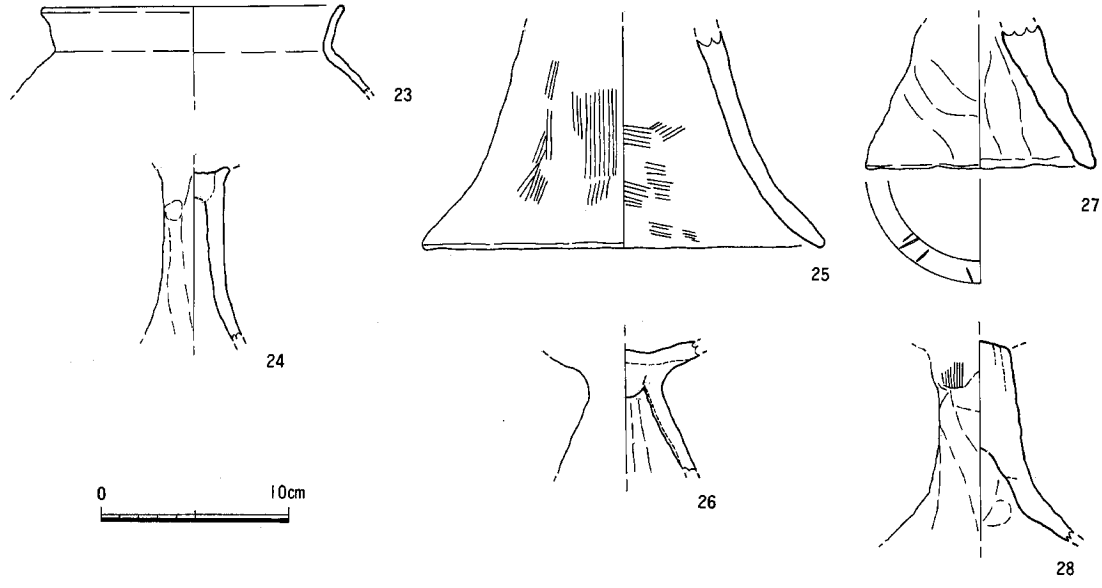


Fig. 6　その他の出土遺物実測図（1/4）

が見られる。5から9は朝顔形埴輪である。5～8は口縁で、緩やかに外反する。8は口縁上半が接合部で欠損している。色調は黄灰色を呈する。9は頸部である。頸部の付け根には突帯を施す。頸部径は22cmを測る。これらの埴輪の胎土には赤色粒子が含まれている。10は鉄製の刀子である。刃部は殆どが欠損しており、茎が残るのみである。

11～13は土師器である。11、12は小型丸底壺である。口縁はくの字に折れる。13は高坏脚部で、ラッパ形を呈する。14～16は高坏の脚部である。17～21は器台で、器面に叩きを施す。22は砥石である。3面に研面が見られる。

5．その他の出土遺物(Fig. 6)

今回の調査で出土した遺物の総量はコンテナ5箱である。殆どが周濠からの遺物である。前回の2次調査で検出された旧石器の包含層は見られなかった。ここでは周濠以外の遺物を紹介する。

23は甕である。口縁はくの字に折れる。SP－18出土。24は高坏の脚部である。SP－28出土。25、26は器台である。SP－12出土。27、28は高坏の脚部である。表採。

6．まとめ

今回の調査では第2次調査で発見された井尻B1号墳の周濠を検出した。ここではこれまでの調査成果を基に古墳の概要を記述して、まとめとしたい。

墳丘　墳丘は早い段階の削平のため、全く残っていないが、周濠が深さ0.2～0.3m程遺存する。周濠は円形に巡り、今回の調査で円周の約1／2が検出されたことになる。幅は3.0～4.0mを測る。墳形は円墳と考えられるが、東側に張り出しがつく可能性もある。墳径は周溝の内側の下端で約19m、外側で約24mを測る。周濠内に崩落した石等はほとんど見られないことから、葺石はなかったものと考えられる。主体部は検出されておらず、形態は不明である。未調査部分で掘り方などが検出されることも考えられる。

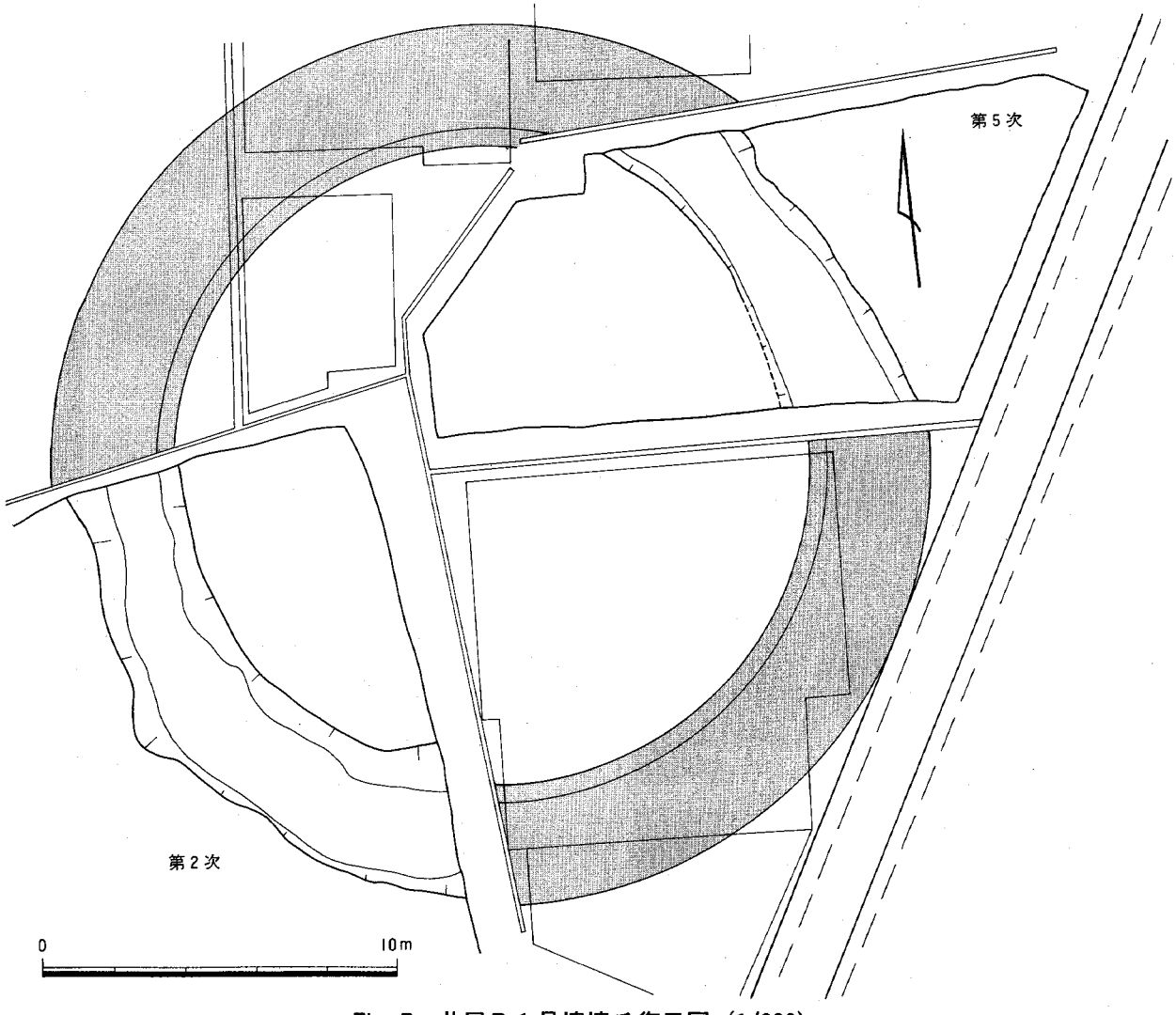


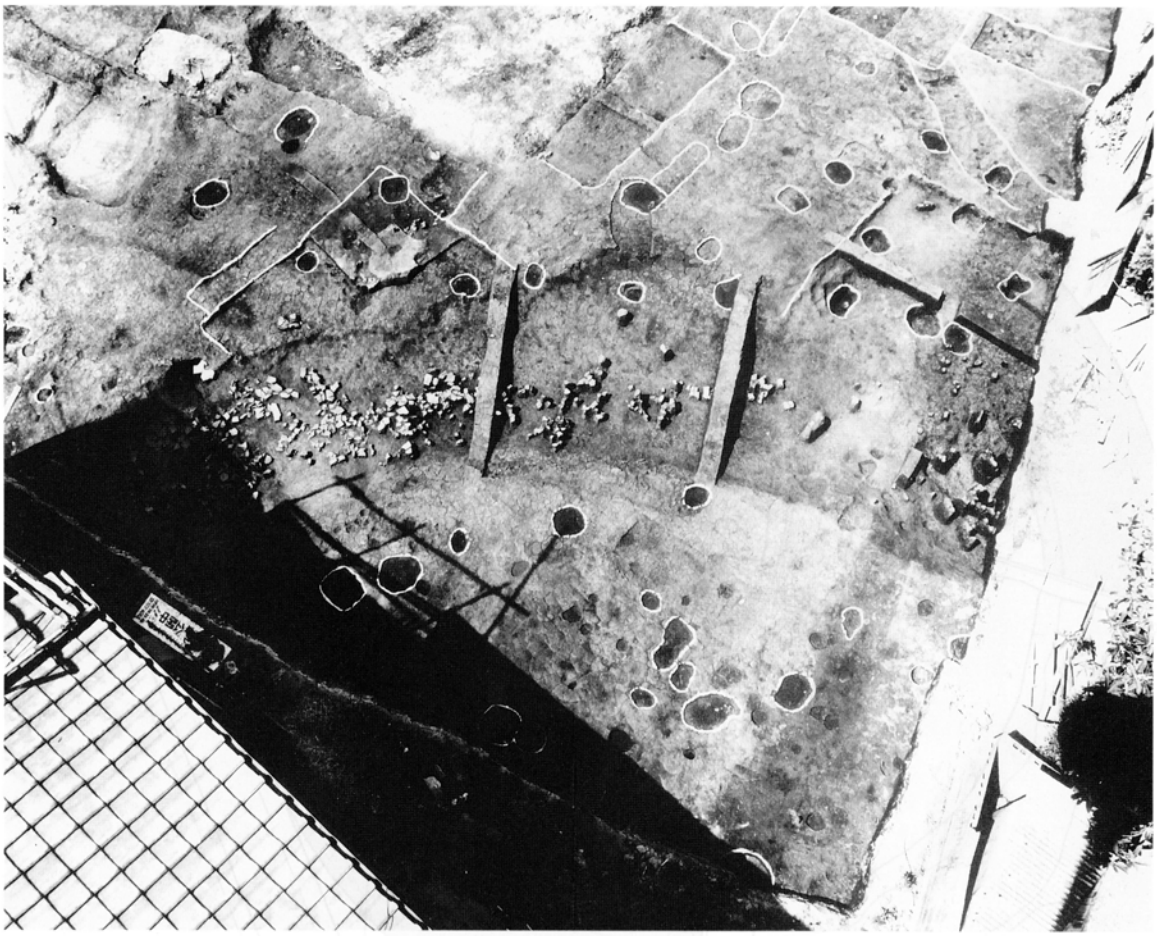
Fig. 7　井尻B 1号墳墳丘復元図（1/200）

遺物　古墳に伴う遺物はすべて周濠から出土している。遺物には円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、須恵器大甕、高杯、鉄刀、鉄剣、刀子、ガラス製小玉などがある。円筒埴輪、朝顔形埴輪は周濠の全域から検出されており、墳丘を巡る様に配置されたと考えられる。今回の調査では須恵器は出土しておらず、須恵器大甕、高杯は第2次調査、周濠の南側で破砕された状態で出土している。これらの須恵器が墓前祭祀に使用されたと考えられる。ほぼ同時期に位置付けられる梅林古墳では石室の開口した側のくびれ部で、須恵器の器台と高杯が破砕された状態で出土している。このような状況から主体部が横穴式石室であれば、南側に開口する蓋然性が高いと考えられる。

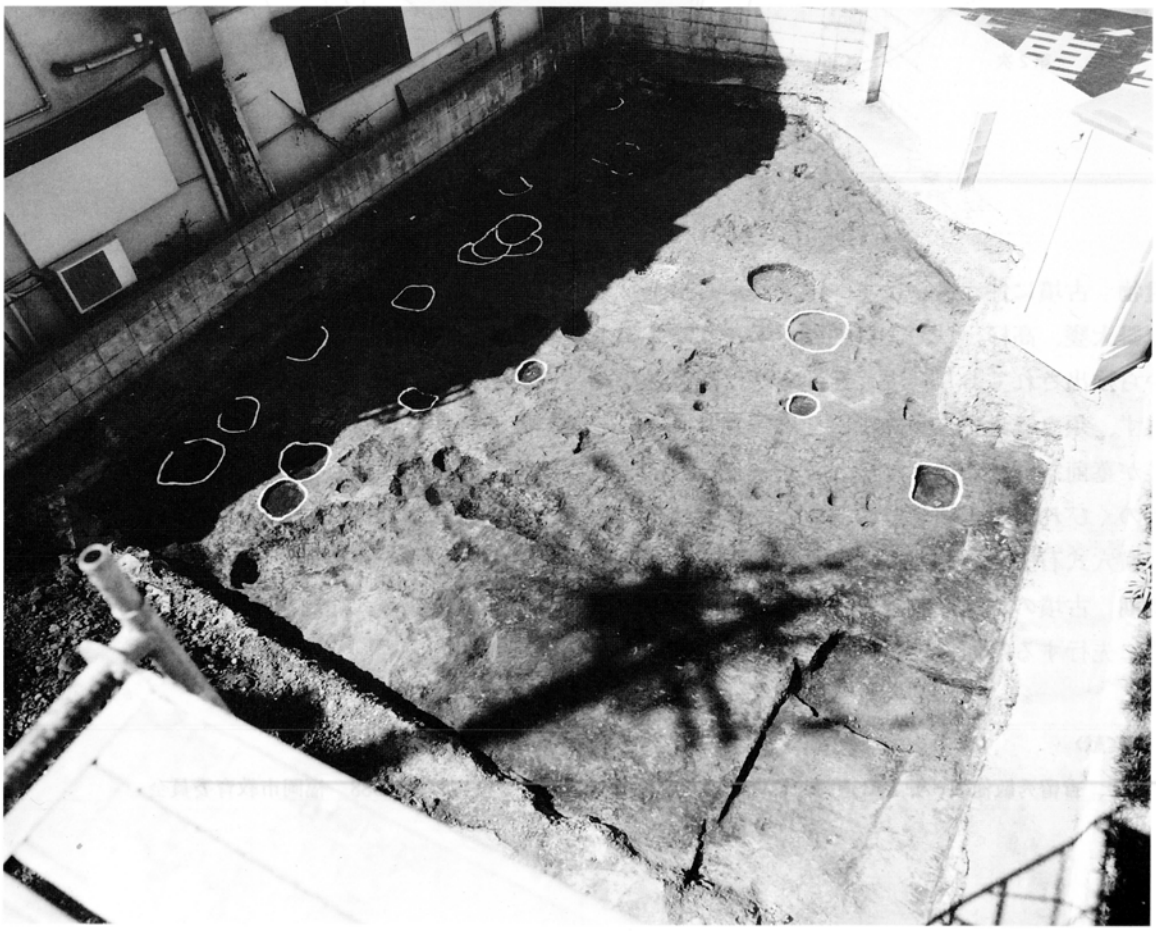
時期　古墳の時期は埴輪や須恵器などから5世紀後半と推定される。那珂川中、下流域では剣塚北古墳に先行する時期に位置付けられる。

〈参考文献〉

山口譲治、吉留秀敏他編「井尻B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集　1988　福岡市教育委員会



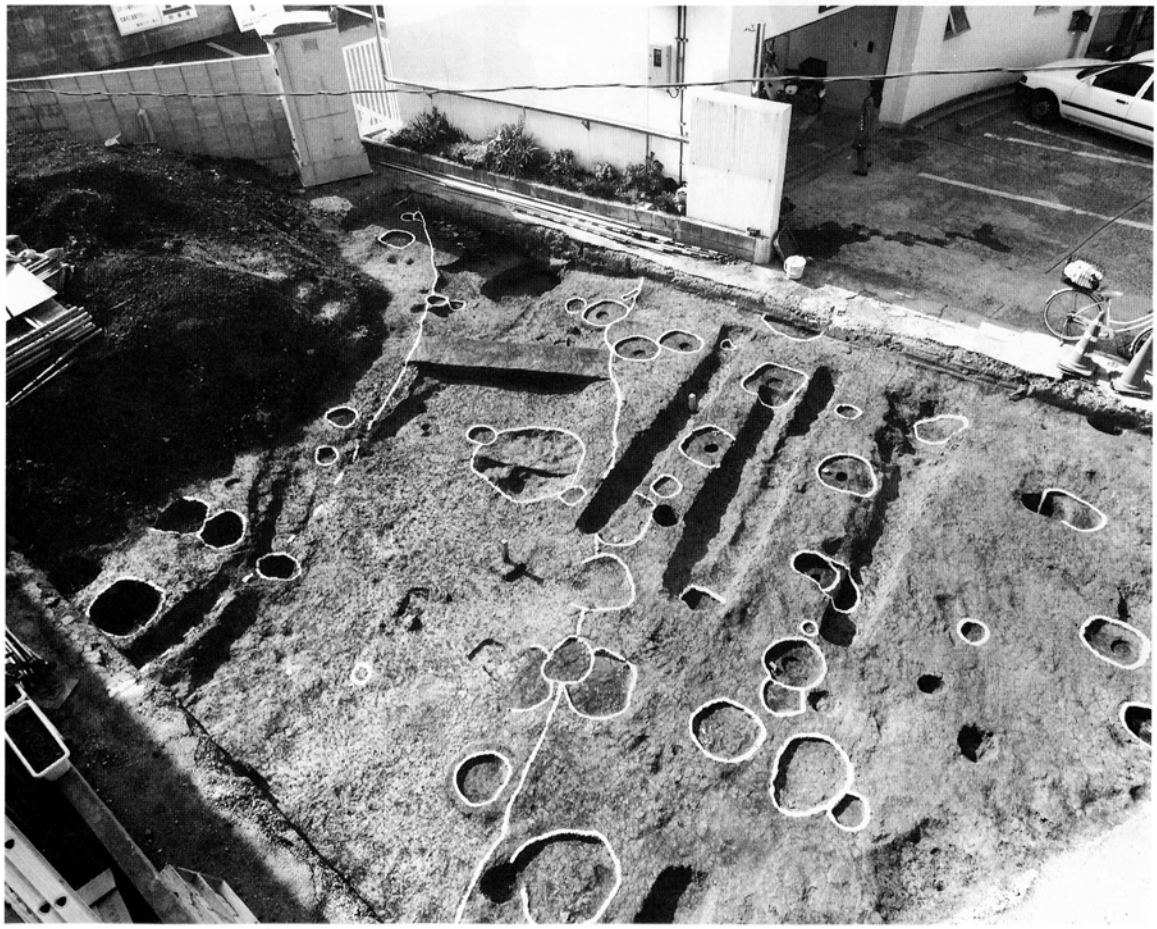
1



2

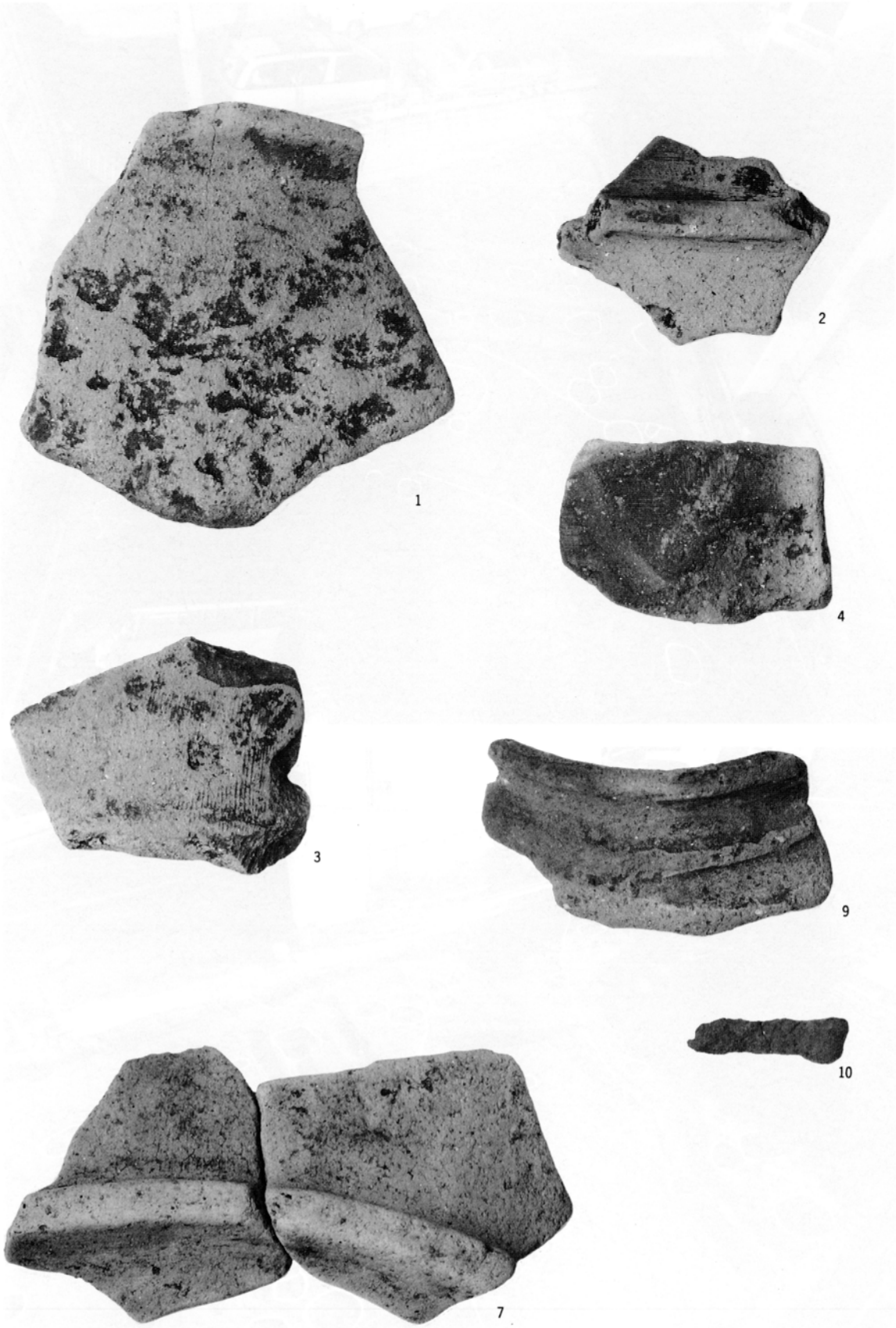
1. 第 2 次調査全景（南から）　　2. 第 5 次調査北側全景（南から）

1



2

1. 第５次調査南側全景（北から）　　2. １号墳周濠完掘（西から）



周濠出土遺物

第３章　南八幡遺跡群第５次調査の記録

１．調査にいたる経過

1994年（平成６年）10月11日、熊澤章子、熊澤由美子両氏より博多区寿町２丁目84番、85番１における埋蔵文化財事前審査願が埋蔵文化財課に提出された。申請地は南八幡遺跡群の範囲内であり、第４次調査地の隣接地でもあったので、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を同年10月18日に実施した。試掘は道路面より高い敷地南寄りに東西方向・南北方向のトレンチ各１本を設け、地表下0.4mの鳥栖ローム上面で竪穴住居跡１棟と弥生土器を検出し、弥生後期の集落の存在が推定された。申請地で売買後に予定されるボクシングジム建設の遺跡への影響が懸念され、関係者と協議の結果、記録保存のための本調査を実施することとなった。本調査は1994年12月１日から着手した。

２．これまでの調査成果

南八幡遺跡群では、過去６回の調査が行われているが、広い遺跡範囲のうちごくわずかにしかならない。これは、遺跡群の中央部である台地の項部が早くから削平されているため、開発などに際して正式発掘調査を要することが少ないためである。過去の調査地点も、第１次調査は遺跡群の北端、隣接する第２次・第３次調査は遺跡群の南端近く、やはり隣接する第４次・第５次調査は遺跡群の西側斜面、第６次調査は遺跡群東端の別の台地の西側斜面と、互いに離れている。検出された遺構は、第１次調査では古墳時代の溝、第２次・第３次調査では古墳時代・奈良時代の集落、第４次調査では時

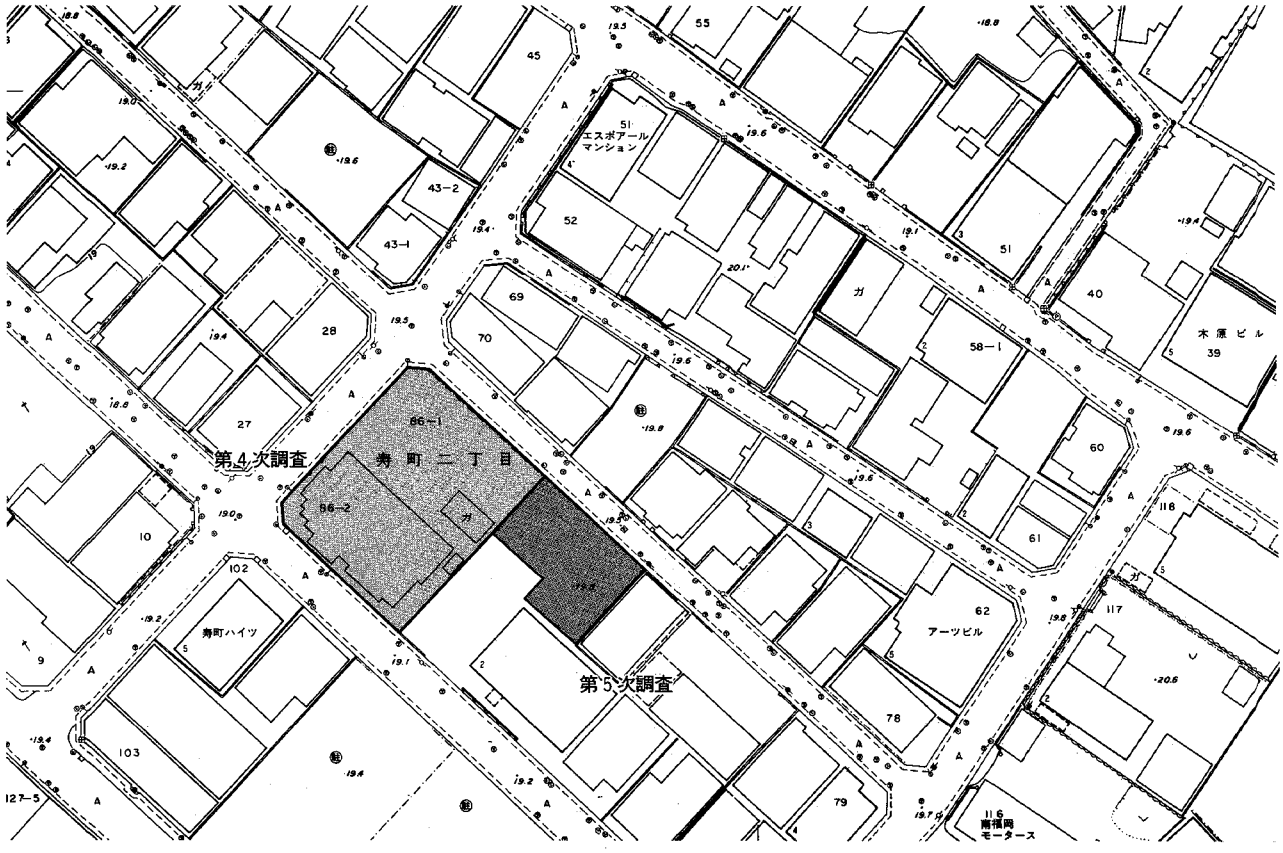


Fig. 8　南八幡遺跡群第５次調査　調査区位置図（1/1000）

期不明の掘立柱建物跡、第６次調査では奈良時代の集落である。

第１次調査	7937	南八幡２丁目８－５	1979.10.12.～1979.11.10.	第489集
第２次調査	8413	寿町２丁目119－１	1984.10.17.～1984.12.15.	第128集
第３次調査	8652	寿町２丁目４－12	1986.12.15.～1987.3.31.	第181集
第４次調査	9112	寿町２丁目86番１・２	1991.5.23.～1991.6.15.	第277集
第５次調査	9452	寿町２丁目84番、85番１	1994.12.1.～1994.12.20.	今回報告
第６次調査	9508	元町１丁目19－４	1995.5.12.～1995.5.25.	来年度以降報告予定

３．調査の記録

（１）　調査の概要

12月１日、竪穴住居跡の調査に先立ち、対象地の北寄りの部分を再試掘した。特に敷地の北西辺寄りは、第４次調査の掘立柱建物が続いている可能性もあった。しかし、地表のバラス下に幾分の攪乱層を経て明黄色の鳥栖ローム層となり、遺構・遺物は発見されなかったので、すぐに埋め戻し、敷地の奥（南西隅）の竪穴住居跡の調査に移った。表土下に竪穴住居跡が検出され、調査区南西隅近くでわずかに黒褐色包含層が遺存していた。

12月５日に改めて遺構確認を行い、長方形の竪穴住居跡１軒と、周辺に小ピットを検出した。竪穴住居跡をSC－01として掘り下げ、12月７日までに床面を検出した。

12月８日・12日に写真撮影をし、12日から実測を行った。

12月13日、住居の壁の下に入り込んでいるSK－02を断ち割った。

12月14日にSC－01の貼床を剥したが、主柱穴は確認できなかった。

12月20日、SC－01の掘方をさらに掘り下げたが、柱穴は認識できず、ローム層中の遺物も検出されなかったので、調査区全体の埋め戻しを行い、調査を終了した。

（２）　層位の状況

調査地点は第４次調査の隣接地で、標高20mである。調査区内は現況では南高北低の緩斜面をなすが、もとは北東側が高く南西側が低い地形だったものが削平されている。

調査対象地内の表土はバラスである。

バラス層の下は、北側と東側ではすぐに鳥栖ローム層となっているが、南西側ではバラス層下に現代の廃棄物を混ずる黒褐色土層、さらに薄いローム整地層がある。

ローム整地層は、竪穴住居跡と黒褐色包含層の遺存する部分にのみ貼られており、削平後、鳥栖ロームの見えぬ部分にのみロームを補い、整地したものである。丁寧に貼られており、地山と見紛うほどであった。ローム整地層下にも現代の廃棄物を含む攪乱があり、現代の整地である。

ローム整地層を剥ぎ取った後の鳥栖ローム層上面で、遺構を検出した。したがって、検出面より上はすべて現代の攪乱層である。ただし、調査区南西隅の一部には厚さわずか数cmの黒色包含層が残っていた。遺構検出面は標高19.6～19.7m地点である。

地山の鳥栖ローム層は、調査区南西寄りでは赤色粒子を含み茶褐色を呈するが、北東寄りでは明るい黄色である。南西に低く、北東に高い旧地形が推察できる。なお、ローム層を掘り下げてもローム層中の遺物の存在は確認されず、遺構覆土中にも全く石器（砥石19を除く）を混じていなかった。今回の調査地点に関する限り、旧石器時代の人の痕跡は存在しない。

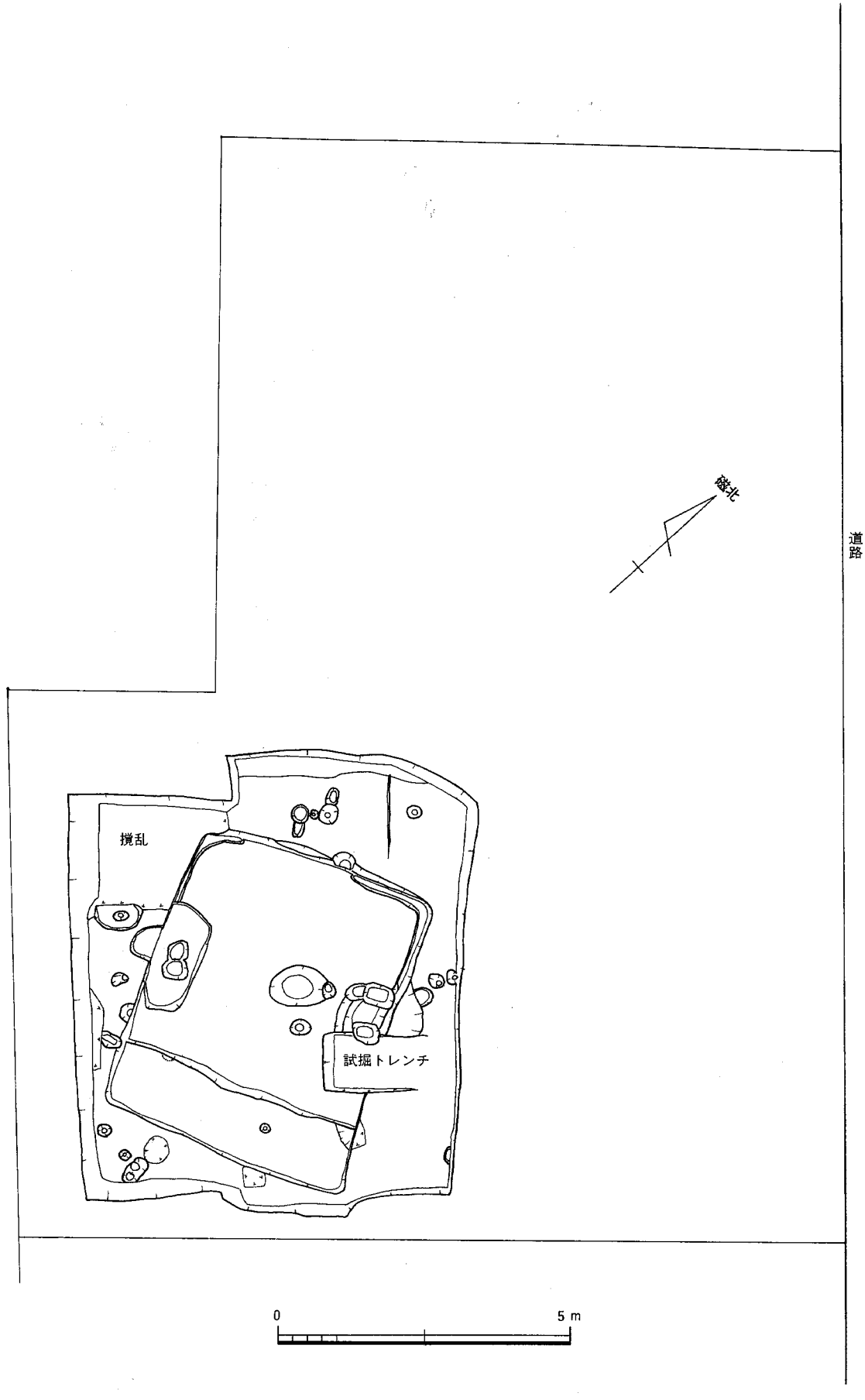


Fig. 9　南八幡遺跡群第５次調査遺構配置図（1/100）

（3）　遺構―竪穴住居跡と屋内施設―

旧地形のもっとも低かった敷地の南西隅にのみ、竪穴住居跡１棟が遺存していた。検出面より下は、調査区西隅以外に攪乱がほとんどなく、遺構の遺存状態は良好であった。

竪穴住居跡をSC－01とし、屋内施設のうち、東壁沿いの土坑をSK－01、西壁沿いの土坑をSK－02とした。床面の浅い掘り込みのうち、遺物を出土したものをSP－02、SP－03とし、SK－01内の小ピットのうち、南側のものをSP－05、北側のものをSP－07とした。SP－01、04、06は欠番である。

SC－01(Fig.10、PL.4(2))

長方形の竪穴住居跡である。検出面で南北5.5m、東西4.4m、床面で南北5.32m、東西4.13m、残存する深さは最深で0.48mを測る。検出面では北壁中央が突き出して見えるが、北壁が若干崩れているためであり、北壁近くの覆土上層にロームブロックを含むこともこの推定を支持する。床面では北壁も直線的であり、北壁の下半はほぼ直立する。南壁もほぼ直立するが、東壁・西壁には内傾気味の部分もある。全体に遺存状態はよいが、試掘時に東壁の一部とその直下の床面が失われている。

南壁沿いの幅1.00～1.24mにロームを貼って、一段高いベッド状遺構とする。ベッドの高さは0.10～0.20mである。

ベッド状遺構の縁辺のうち、西壁寄りに半円形の赤い被熱部分があるが、非常に狭く、被熱も弱い。あるいは、もっとも被熱した部分が既に切りとられているかも知れない。

貼床は、北半に薄く、南半に厚い。ベッド状遺構の部分は掘方の時点でやや高くなるように地山を削っており、さらにはロームを貼って整えている。貼床の厚さは最大でも0.1m程度である。貼床下にも、ほとんど柱穴らしきものは確認できず、浅い掘り込みがわずかにみられるのみであった。

東壁中央北寄り（ベッド部分を除いた東壁のほぼ中央）に土坑SK－01、西壁中央北寄り（ベッド部分を除いた西壁のほぼ中央）に土坑SK－02が検出された。

東壁北半(SK－01北端）から北壁を経て西壁北半(SK－02北端）にかけて壁溝がめぐる。SK－01、SK－02の南側とベッド下には壁溝はみられなかった。

床面には、茶褐色土を覆土とする浅い掘り込みがいくつかみられたが、主柱穴といえるものは確認されなかった。南東隅付近・南西隅付近のベッド上と北東隅近くの床面で、炭化物が多くみられる地点があり、床面に４本の柱を直接立てた痕跡かも知れない。

床面からは完形の土器数点と砥石１点が出土した。

住居の覆土は上下２層に分かれ、上層・下層の境界は下に凸の緩曲線をなす、いわゆるレンズ状堆積を示す。下層は茶褐色土、上層は黒色土である。覆土中の遺物は主に下層から出土した。

SK－01(PL.5(1))

SC－01東壁中央北寄り（ベッドを除く東壁ほぼ中央）に位置する。試掘トレンチで一部破壊されているが、ほぼ長方形を呈する。底の南北両端に、東西に長い長方形の小ピット２基(SP－05、SP－07）があり、それぞれ外寄りに細長く黒色の柱痕跡が確認される。ピットを除くSK－01覆土は締まりの悪い黒色土であるが、ピットは柱痕跡のみ黒色で、ほかは淡茶褐色を呈する。黒色土は住居覆土の下層（茶褐色土）とは異なり、住居埋没以前に人為的に埋め戻した可能性も考えられる。

SK－02(PL.5(2))

SC－01西壁中央北寄り（ベッドを除く西壁ほぼ中央）に位置し、住居西壁の下に入り込んでいる。長楕円形を呈する。覆土は、壁寄りでは黒色土、住居中央寄りでは貼床と同様の黄褐色粘土である。住居廃棄後に貼床の粘土が流出したためであろう。床は平らではなく、小ピット２基が存在する。

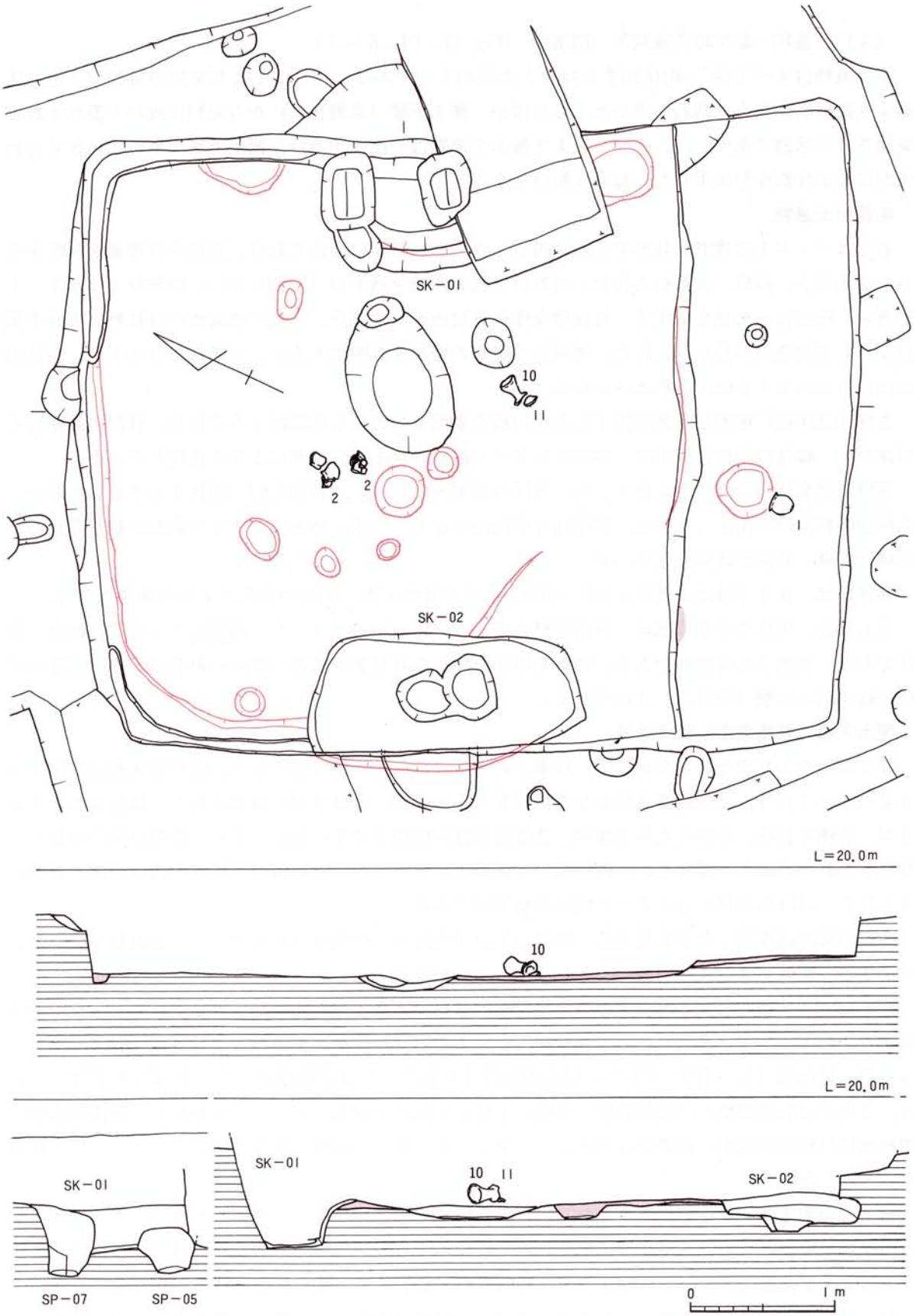


Fig. 10　南八幡遺跡群第５次調査ＳＣ－01実測図（1/40）

（4）　遺物－弥生時代後期の一括遺物－(Fig. 11、PL. 6 ～ 7)

出土遺物はすべてSC－01床面または覆土からのものである。ベッド上より完形の無頸壺1点、床面より高杯破片数点、砥石1点が出土したほか、覆土下層（茶褐色土）から完形に近い土器が十数点廃棄された状態で出土した。床面・覆土下層出土遺物は一括性が高い。覆土上層（黒色土）からもわずかに土器片数片が出土した。都合4箱分である。

床面出土遺物

壺1はベッド上に横倒し状態で完形で出土した。ヨコ方向に割れており、素地の接着面を反映するものであろう。砂粒、長石粒を含む。底部は平底の痕跡を残すが、安定しない。器壁は下に厚く、上に薄い。内面は赤褐色を呈する。外面は全体に黄褐色を呈するが、一部に焼成後の再被熱により赤褐色ないし黒褐色の部分がみられる。摩滅して器面調整は不分明であるが、口縁部はヨコナデ、胴部内面は何らかのタテ方向の調整とみられる。

高杯10は床面に横倒し状態で出土した。円板充塡部分が欠失した高杯とみられる。杯部の調整は不明確だが、脚部は内面にシボリ、外面にハケメが観察される。再被熱により赤色化している。

高杯11は高杯10に隣接して出土した。高杯の脚端とすれば、高杯10と同一個体とも考えられるが、高杯10の杯部側で出土している。脚端はやや凹面をなしている。外面はヨコナデ調整が観察される。高杯10同様、外面が再被熱している。

高杯16は、覆土下層出土破片とSP－03出土破片が接合した。円形の透孔が1カ所確認される。

砥石19は、中央で2個に割れ、位置を整えてともに床面から出土した。両破片ともさらに細かく割れており、被熱した可能性がある。磨製石斧を転用した頁岩製の肌理の細かい砥石である。石斧の刃部は転用前に加撃（叩打か）されている。

覆土下層（茶褐色土）出土遺物

壺2は床面よりやや浮いた位置で、投棄され2つに割れた状態で出土した。破片は床面ほぼ直上でも見つかっており、住居廃棄後間もなくの投棄とみられる。ほぼ完形に復元された。精良な胎土であるが、小礫を含む。全体に丸みを帯び、底部は平底の痕跡を残すが安定しない。器壁は凹凸が激しく、厚さが0.4～0.9cmと一定しない。内外面とも黄褐色を呈するが、外面胴部・底部、内面底部に黒斑がみられる。口縁部の強いヨコナデの他は調整不明である。

壺3の底部は安定した平底である。胴部以上は半周程度しか復元されなかった。茶褐色の暗い色調を呈する。摩滅が著しく、内面のハケが辛うじて観察される。

甕6はベッド際で出土した。4分の1周程度の遺存である。内外面はハケ調整されているが、内外面とも、胴部ハケメが細かく、肩部・口縁部ハケメが粗い。外面ハケメの切り合いは[胴部{右→左}→肩部・口縁部{左→右}]であり、肩部内面はユビ跡でハケメが消され、さらにヨコナデされている。これらは胴部調整と口縁部調整との間に工程上の隔たりがあったこと、すなわち、胴部の成形・調整後に口縁部の成形・調整が行われたことを示していよう。肩部で器厚を増すことも、この工程復元と矛盾しない。

甕7は茶褐色土層を中心に出土した。遺存の良い口縁部と底部を中心とする大半は、一次埋没土中の土器群に含まれる。住居廃棄後投棄された土器に属する。一部破片を欠くが、ほぼ完形に復元された。器壁は胴部最大径付近が極端に薄く、他は厚い。砂粒を多く含む胎土である。焼成は悪くないようだが、摩滅が著しい。胴部に一部タテハケメ、口縁部内外面にヨコナデが観察される。内外面とも黄褐色を呈するが、口縁部付近と底部は赤みが強い。黒斑は、胴部上半と反対側の胴部下半の、都合2カ所が認められる。

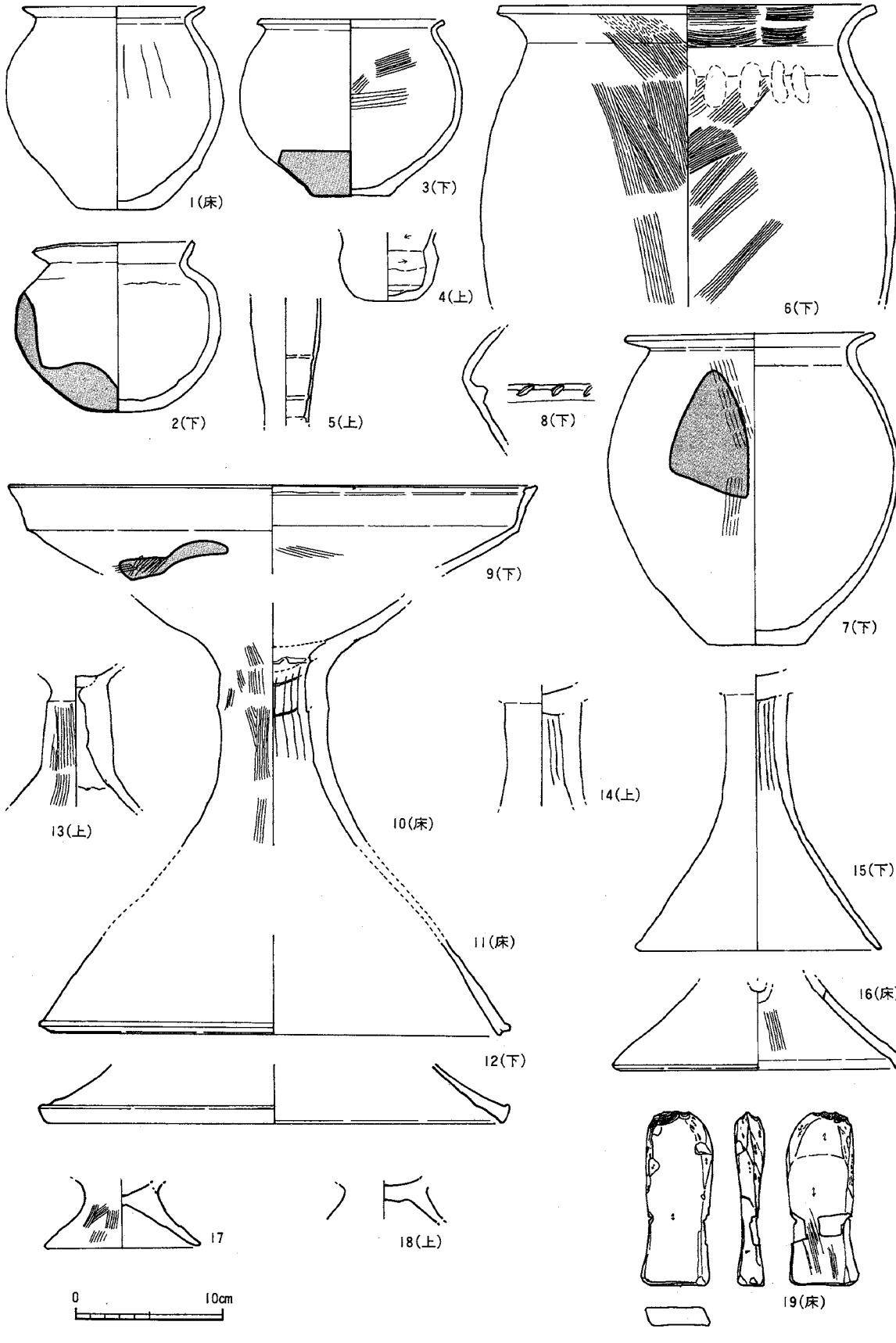


Fig. 11　南八幡遺跡群第5次調査出土遺物（1/4）

甕８は細片が多数出土したが、摩滅が進んでおり、破片も揃っておらず、復元には限界があった。大型の甕の口縁部である。摩滅が進んで調整は不明だが、突帯には斜方向の刻目がみられる。

高杯９は破片からの復元であり、口径は推定である。小礫を多く含む胎土などからみて、福岡平野の製品であるが、瀬戸内系の高杯の口縁部形態をよく維持しており、口縁端部はやや内方に折り込み、段と凹面をなす。調整は摩滅しているが、外面にミガキ、内面にハケメが辛うじて観察される。

高杯12は脚部であるが、法量・傾きは不明確である。調整も摩滅している。

高杯15は杯部が中央を除き欠失している。円板充塡ではなさそうである。脚部はほぼ全周遺存するが、遺存部分に透孔はみられない。摩滅が著しく、本来の器面はほとんど失われており、内面シボリのほかは調整不明である。

覆土上層（黒色土）出土遺物

壺４はほかの出土遺物と様相を異にし、住居に伴うものとはいえない。手捏ね成形され、外面はナデ、内面は底面がナデ、側面と口縁部がケズリにより調整されている。

壺５は細頸壺の口縁部、または高杯の脚部とみられる。オレンジ色を呈し、非常に薄手である。

高杯13は円板充塡技法が観察される。再被熱してピンク色を呈する。外面ハケ調整されている。

高杯14は脚基部である。円板充塡技法は認められない。内面にシボリ痕がみられるほかは、調整が摩滅している。

脚部17は、出土層位が不明だが、床面・下層の遺物とは様相が異なるので、ここで触れる。在地の土器とは考えがたい。外面にハケ調整が観察される。

脚基部18も全体の器形は不明である。調整は摩滅している。

４．小結

（１）　集落と住居について

南八幡遺跡群は、これまで古墳時代～古代の集落遺跡として知られていたが、今回の調査で弥生時代後期の集落も存在した可能性が示された。ただし、集落として大々的に展開するといった類のものではなかったこともわかる。覆土上層から古墳時代に降るべき土器が出土したことは、周辺に古墳時代の遺構が存在した可能性を示唆しているとともに、中間の時期の遺物が混入していないことから、SC－01以後に集落がほとんど展開しなかったことの傍証にもなろう。

また、住居廃棄時に屋内土坑から施設物を抜去し、埋め戻す行為が看取された。いずれ詳論したい。

（２）　弥生土器について

SC－01の床面・覆土下層出土遺物は、弥生時代後期の良好な一括遺物と捉えることができる。

出土遺物のうち、壺・甕などの底部は、完全な平底のものと、平底の痕跡は残しつつもやや安定を欠くものとがあり、後期前半と位置づけて大過あるまい。

対して、高杯には瀬戸内系のそれの器形を模倣したものがあり、成形には円板充塡の技法が認められる。これらの高杯は、福岡平野において後期後半にみられるそれに近い様相を示す。瀬戸内系の高杯は糸島半島などでは後期前半に早くも現れ、福岡平野では遅れて出現すると考えられていた。

報告者としては、土器編年の骨格は在地系のものを第一とすべきと考え、SC－01出土遺物をひとまず弥生時代後期前半と捉え、瀬戸内系の高杯も、出土状況からみて、当該期の器種組成の一員であったと考えたい。

SC－01出土資料は弥生時代後期の土器編年や地域間関係追求において重要資料となるであろう。

1．調査対象地全景（北から）

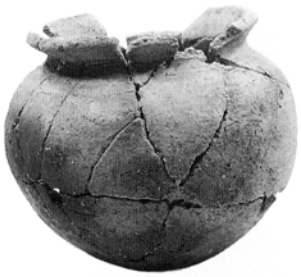
2．調査区全景（北から）

1. SK−01

2. SK−02

1．土器出土状況

壺１（床面）

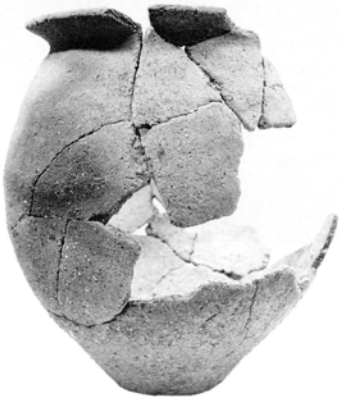


壺２（下層）

2．出土遺物

壺 3（下層）

甕 6（下層）



甕 7（下層）

高杯 9（下層）

高杯10（床面）

砥石19（床面）

出土遺物

井尻B遺跡 4
南八幡遺跡 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第441集

1996年3月31日発行

発 行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1－8－1
印 刷　㈱西日本新聞印刷

井尻B遺跡4
南八幡遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第441集

1996

福岡市教育委員会